



葛尾村 業務実施報告書

大学生の力を活用した集落復興支援事業

令和2年3月1日

葛尾村の聞き取り調査を通して分かったこと・感じたこと

広島大学ボランティア団体アイリス

iris.hiroshima.0707@gmail.com

葛尾村 業務実施報告書 目次

内容

葛尾村 業務実施報告書 目次.....	1
第一章 実態調査の内容	3
第一節 私たちの団体について	3
第二節 参加の動機	4
第三節 葛尾村の概要.....	5
第四節 調査の目的と概要.....	6
第五節 調査の方法	7
第六節 活動状況	8
第二章 実態調査の結果(実態調査の過程で発見した地域資源(宝))	15
第一節 集落(地区)の地域資源	15
第一項 郷土料理	15
第二項 広大な土地.....	16
第三項 村の人々の温かさ、思いやる心	16
第四項 村の人々の絆の強さ	17
第五項 歴史的に価値あるものがある	17
第六項 教育の柔軟性, 工夫, 教師たちの熱量	18

第七項	昔ながらの結婚式の仕方を知っていること	18
第二節	実態調査の結果を踏まえた集落(地区)の活性化策	19
第一項	実態調査を通して感じた課題	19
第二項	実態調査の結果を踏まえた集落(地区)の活性化策	22
第三節	調査のまとめ	23
第一項	葛尾村の調査を振り返っての率直な感想	23
第二項	来年度に向けて	28
謝辞	29

第一章 実態調査の内容

第一節 私たちの団体について

私たちボランティア団体アイリスは、去年の7月の西日本豪雨災害を機に発足した団体です。大きな自然災害を身近に経験し、何かできないことがないかと発災直後は土砂だし、ボランティアセンターの立ち上げ、避難所での交流等を行ってきました。

土砂や家具の運び出しなどのハード面での支援が落ち着いてきたところからは、活動の中でできた地域の方や行政・他のボランティア団体とのつながりを大切にし、イベントの運営の補助を中心とした心の支援を行ってきました。

私たちが大切にしているのは、現地のニーズは何かしっかりと見極めて活動をするということです。地域の方のことばをしっかりと受け、地域の方の思いを大切にしたいと思ひ日々活動しております。メンバーは皆、人と関わるのが好きなメンバーです。地域の方との交流を楽しみながら活動をしています。

また、発災直後の緊急期の「ボランティアをどの段階の家を優先して配置するか、どうニーズの把握をするのか」といった課題から、ソフト面に移行した後の「仮設住宅での世代間交流をつくるにはどうするか」や「大学生だからこそできる支援とはな

にか」といったことまで、多くの課題をメンバーで話し合いながら乗り越えてきました。活動を通して実践的な課題解決の方法を学ぶことができていると感じております。

第二節 参加の動機

今回このプロジェクトに参加した理由は大きく2点あります。

1点目は、私たちがしている西日本豪雨災害の支援の未来を見て、災害支援において自分達のできることを模索したいと考えたからです。東日本大震災で過疎・中山間地域にある集落で地域の担い手不足が進行しているという現状は広島県の被災地でも現に起こり始めていることです。今回の調査に真剣に取り組み、大学生としてできることはどんなことなのか、学びたいという思いがありました。西日本豪雨災害と東日本大震災では、豪雨と地震・津波と災害の種類は違いますが、被害を受けられた方の悲しみや被災地の復興に向けた課題では共通するところが多いと思います。福島県の方々と本気で向き合い、ともに課題解決の方法を模索したいと思いました。

2点目は、広島にいるということを活かして、福島県の集落と広島をつなぐ企画ができるのではないかと考えたからです。私たちは去年の東京や福島などの近隣からの参

加者の方々と比べて、距離があることが調査に頻繁に行くことができないなどの課題ともなります。しかし、広島をまきこんだ活動を考え、福島のことをもっと西日本の人々にも知ってもらうことで福島の応援者を増やすという活動が展開できるのではないかと考えます。大きな自然災害を経験した広島をはじめとした西日本と福島をつなぐ役割ができないかということ活動を活動の中で考えていきたいと考えました。広島大学の学生が過去に、東日本大震災の後に何回か福島におじゃまし、ともに活動させてもらっていたということもあり、先輩から福島の方々の温かい人柄や地域性などのお話をきいていました。私たちも福島の方々に出会いたい、できることをしたいという思いがあります。現地にいられる時間は限られた時間になりますが、その分、地域の方々といられる時間を大切に過ごし、しっかりと向き合いたいと考えました。

第三節 葛尾村の概要

葛尾村は、平成23年3月に発生した東日本大震災およびそれに伴う原発事故により全村避難を余儀なくされ、平成28年6月に一部地域を除く避難指示が解除されて、少しずつ住民の帰村が進んできた地域です。もともと過疎・中山間地域の集落であるところに全村避難になったことで、世帯主夫婦棟は帰村しているものの、若者世代の多くが村外に住宅を求めて帰村が進まず、震災前と比べて一気に高齢化率が上がりました。（集落の高齢化率は令和元年6月1

日段階の住基人口ベースで 70.2%。居民ベースでは 78.4%) また、優良農地が放射性廃棄物の仮置き場になっていることから、営農再開が遅れている側面があり、かつ今後の担い手確保に不安を抱えています。その中であって、帰村した住民は精力的に活動し、支え合う中で集落内の団結力は強固です。

また、今回調査に訪れた下葛尾村地区は、震災前から農業畜産業が盛んな自然豊かな村で平成 28 年 6 月の一部地域を除く避難解除から 3 年が経過し、少しずつ住民の帰村が進み、6 月 11 日の段階では居住者は 405 人（居住率 31.4%）となっています。中でも、下葛尾集落は、帰村している世帯割合が最も高く、住民同士での助け合い、交流が活発な地域です。

第四節 調査の目的と概要

今回の調査の目的は以下の二点があります。

①初めて葛尾村を訪れる人がどう感じるか、自分達の変化を記録する。

②今の葛尾村をしっかりと見取り、記録する。

①の理由としては、葛尾村の復興に関わり共に取り組んでいく過程でまず、福島から遠く離れた場所にいる人々、葛尾村の事を知らない人々が葛尾村に関わっていく中でどのようなことを感じるのか、そのような感じ方の変化があるのかを毎日インタビ

ューして残していくことで、客観的に今後の外部に向けたアプローチを考えていくことができると思ったからです。

②の理由としては、災害があってから刻一刻と復興に向けて変化していくなかで、今の葛尾村をしっかりと記録していくことは後世に葛尾村の様子を伝えることや、災害からの復興について考えるきっかけを与えることにつながると考えたからです。

これらの目的を踏まえて調査を進めます。

第五節 調査の方法

今回は聞き取り調査という手法をとって調査を行いました。下葛尾村の村民に聞き取りをし、その他にも社会福祉協議会や学校など村にある様々な施設を視察、聞き取りを行いました。

第六節 活動状況

12月17日(火)

葛尾村に到着し、集落全体を視察しました。復興交流館あぜりあ、大尽屋敷などを巡りました。夜には村民との顔合わせのための交流会を行い、今後調査を行っていく方々と顔見知りになることができました。





12月18日（水）

朝には葛尾村の歴史について資料館にて知り、その後むらづくり公社を訪れました。むらづくり公社は村の人々が交流する場や機会を提供しながら村を活性化しようとしている一般社団法人です。むらづくり公社が入っている復興交流館あぜりあのことについても話を聞くことができました。午後は葛力創造舎を訪問し、若者をインターンとして巻き込みながら地域活性化へ向けて取り組んでいることについて話をうかがいました。また、夕方には村の人の話を聞き、村の歴史や災害時の話、現在の取り組みについての話などを伺うことができました。



12月19日(木)

教育を中心とした場所に伺わせていただきました。午前中は教育長から葛尾村の教育状況をお聞きしました。そのことをふまえ、午後には実際に葛尾小学校、葛尾中学校の現場を見たり、小中学生や学校職員と直接話したりしました。夜には村の婦人会の方々がけんちんうどんをふるまってくださいました。



12月20日(金)

役場や、商工会、社会福祉協議会の方にお話を伺いました。行っている事業についてお聞きすることで、その方々の視点から村の現状を知ることができました。また、住民への聞き取りも連日行っており、20日には元村長にもお話を伺いました。村長としてだけでなく、一葛尾村民としての意見も語っていただきました。



21(土)

いわき市で津波や福島原子力発電所について深く学習できました。午前中は語り部さんから発災当時についてお話を聞きました。午後はリプトンふくしまや東京電力廃炉資料館に足を運び、今の課題などニュースでは知りえないことを知る機会となりました。午後はリプトンふくしまや東京電力廃炉資料館に足を運び、現在の課題などニュースでは知りえないことを知る機会となりました。



22(日)

住民の方への聞き取り調査を行いました。聞き取り調査では、葛尾村の実情を知ることができると同時に、この1週間では把握し切れずまだまだ調査しなければならないことが多く存在することを実感しました。午後からは今までお世話になった方々と最後の交流会を行いました。1週間という短い期間でしたが、本当にあたたかく迎え入れていただいたのだと改めて感じるイベントでした。



第二章 実態調査の結果(実態調査の過程で発見した地域資源(宝))

第一節 集落(地区)の地域資源

第一項 郷土料理

村のみなさんと何度も食事をご一緒させていただきました。すべての料理がおいしく、印象に残っているが中でもケンチンうどん、凍みもち、漬物を宝として紹介します。

まず、ケンチンうどんは根菜を中心に野菜をふんだんにつかった暖かい汁料理です。村の方々が2回目の食事会でふるまってくれたものだったが、量もさることながら心まで満たされる料理であり、葛尾村というあたたかい村だからこそ出せる宝の味だと感じました。

次に凍みもちは、福島県内の農家のみで作られてきた郷土料理とのことでした。自然食品で、保存性が長けているだけでなく、ミネラルも含む食品です。この凍みもちはなかなか頻繁に味わえるものではありませんでしたが、醤油と砂糖で味付けされた、子どもから高齢者まで幅広く愛される食品でした。さらに、葛尾村には「しみちゃん」という凍みもちから生まれたキャラクターもあり、まさに村の宝であるといえます。

最後に漬物だが、村の方々が栽培した野菜の漬物を多く食べさせてくれました。特に印象的だったのは、各家庭によってたくあんの味が異なること。どの家庭のものもとてもおいしく、漬物を作ったことのない私たちに「その家庭の味の良さ」を教えてくださいました。村で作られた野菜で作った漬物は、村の宝です。



第二項 広大な土地

山々に囲まれ、自然が豊かな葛尾村には多くの土地があります。そこを活かして工業団地の開発が進んでおり、現在も作成中の工業団地が一つと、もう一つ金泉ニット株式会社という会社がすでにはいつているところがあります。この土地に入る企業には「企業立地補助金」というものが支払われ、葛尾村は広い土地が必要となる企業にとって利点のある場所です。また、昔から農業をしてくている葛尾村は、農地が多くあり、農業をしたい人にとっては活用できる土地が十分にあるといえると言えます。

第三項 村の人々の温かさ、思いやる心

広島から来た私たちを温かく受け入れ、調査に積極的に協力してくださり、食事の面でもサポートしてくださいました。1週間も滞在しましたが、食費は2日分ぐらいしかかかっていません。最後の帰る日には、福島市まで帰るガソリンが残っておらず、帰れないのではないかという状況に陥りました。そのときには住民さん総出で家にある携行缶を持ってきてくださり、満タン近くにまで給油してくださったのは一生忘れません。また、メンバーの一人が早め

に帰ることになっていたのですが、その子のためにけんちんうどんを作って下さる会を企画してくださったことも忘れられない思い出です。私たちの調査にもたくさんの方が快く応じてくださいました。いつも「寒くなかったか」「寝れたか」「ご飯どうしてるか」など心配して私たちのことを気にかけてくださり孫のようにかわいがってくださいました。

第四項 村の人々の絆の強さ

住民の方の多くは小学校からの付き合いで結婚に至っており、村全体が大きな親戚のようなものであると感じました。婦人会の方々が協力して家庭菜園で育てた野菜をあぜりあで販売したり、大学生にカレーを作ったり、葛尾村を活気付けるために住民の方が結束していました。さらには、お金を定期的を集め、その貯めたお金でみんなで旅行に行くことも行っています。私たちの多くが第二の故郷のように感じられたのも葛尾村の住民みなさんの絆があってこそだと思います。

第五項 歴史的に価値あるものがある

葛尾村には歴史的価値のあるものが多くあります。物はもちろん、伝統文化も多くあります。特に三匹獅子舞はストーリー性もあり、とてもおもしろいです。他にも獅子神楽や宝財踊りもあります。そして、村のいたるところに仏像や塔や碑があります。村をめぐるだけではなく、村役場の隣にある郷土文化保存伝習館には村の歴史に詳しい方がおられ、詳しく村の歴史について様々な歴史物を見るときにも知ることができます。

第六項 教育の柔軟性，工夫，教師たちの熱量

葛尾村は全村民避難があったことで、戻ってくる子どもたちの数が激減し、1学年に1人か2人という少人数クラスです。そのため、他の人の意見を聞くことができる機会がないに等しいです。しかし、そのような状況を打破しようと、葛尾小学校の教員が工夫を凝らし、同じような状況にある学校との遠隔合同授業を行っています。そのため、他校の教員同士との横のつながりを大切にしています。授業準備のミーティングを念入りに行い、遠隔授業では、IT機器を巧みに使いこなしています。遠隔授業は、ワンパターンではなく、先生の数を変えたり、子どもたちを主体とした授業を進めたり、様々なやり方を模索して実行しています。また、他校の子どもたちと交流する機会を作るために、「わんぱく教室を土曜日、日曜日に実施する工夫もしています。また、小学校の授業に大人の人が参加する「寿学級」を行うだけでなく、中学生もそこで学ぶ機会があります。このように、教員は熱い思いで少人数クラスの多くの課題に柔軟に対応し、プラスに変えています。

第七項 昔ながらの結婚式の仕方を知っていること

結婚式は昔、集会所や家で行っていました。最近、村で行った結婚式はさらに村の人たちが工夫を凝らし、結婚式の観客で服装をふんどしにする人もいました。結婚式の基本的な着物は白黒で、お葬式の時と同じものを使います。お葬式の時の着物はそもそも礼服ですし、村でお金を持っている人も少なく、晴れ着を着ることができなかったから同じものを使っていたそうです。最近の結婚式では、村の人が自分の着物を喜んで出してきた新郎新婦に使ってもらったそうです。結婚式に正式な形はありません。なぜなら、村での結婚は個人と個人というよりは、家と家であり、宴会のような結婚式だったからです。このお話を笑顔で楽しそうに話す村

の人の様子や普段の村の人の様子から、とても楽しく、あたたかく、幸せな結婚式であることが想像できました。

第二節 実態調査の結果を踏まえた集落(地区)の活性化策

第一項 実態調査を通して感じた課題

今回の調査を通して見つかった課題を以下の7点に整理しました。

(1) 施設

温泉や「復興交流館あぜりあ」という観光客の情報収集の場など混交客向けの施設はありません。村の中に食料品や日常雑貨品を購入できるお店が1, 2店舗しかなく、常に開いている医療施設は村内にはありません。住むのにはとても不便かもしれないと感じました。若い人の移住が増えない要因にインフラの整備も大きく関わっていると思いました。

(2) 後継者

葛尾村では農業が盛んですが、50代以下の若い世代が住んでいません。農業も後継者がいないのですが、数年前から復興のために胡蝶蘭作りに力を入れていますが、後継者がいないと継続することが難しくなるかもしれません。村役場も後継者がいないため村外出身の人が増えています。住民さんの中には慣れ親しんだ村の役員さんが減ったことに対して違和感を持っている人もいます。

(3) 補助金の使い方

政府から福島県には復興に向けた様々な補助金が出ています。それらの活用の仕方として、補助金による農業や建物の建設がありました。あぜりあも補助金を使って建てられた建物です。その維持費に関して質問をしたところ、現在補助金で賄っているとのことなので今後の維持に課題があると感じました。農業に関しても現在は補助金をとれているがそれがなくなると継続が難しいという課題が見つかりました。

(4) 世代間・村内村外のつながり

村役場は村内出身の人だけでなく、村外から来た人もいます。そのため村内村外のつながりが重要です。村内出身者と村外出身者、若い世代と年配の方の間で村の復興に対する考え方が違い、熱意も差があるように感じました。具体的には、土地を守っていくことや、放射線の影響をどれくらい心配しているかということに関して、若い世代は自身も若い子どもがいてその子供の将来を案じるために高齢の方とは違う考えに至っているというところがみられました。うまく世代間・村内村外で意見を共有し、つながれるかが重要だと思いました。

(5) 交通

村内のバスの便が少なく、ご年配の方が多い村で車以外の交通手段がほとんどなく、また村は山道で大きなカーブがあったり急な下り坂があり、ご年配の方が運転するのに危険な道が多いです。また、病院やスーパーなどの主要の施設までの距離もあり、現在は地域の中で運転ができる方がその地域の人を乗せて病院までつれていき買い物もついでにして帰るという体制に

なっているという地域もありました。その車を運転できる村民の方も年を重ねると運転ができなくなります。その際に交通手段をどうするか検討する必要性を感じました。

(6) 非常時の対応

昔から村には、消防団がありましたが現在所属している団員は一人だそうです。それでは機能しないのでもし火事や救急があった際には救急車が来るのに1時間かかります。村内のバスの便が少なく、ご年配の方が多いい村で車以外の交通手段がほとんどなく、また村は山道で大きなカーブがあったり急な下り坂があり、ご年配の方が運転するのに危険な道が多いです。また、病院やスーパーなどの主要の施設までの距離もあり、現在は地域の中で運転ができる方がその地域の人を乗せて病院までつれていき買い物もついでにして帰るという体制になっているという地域もありました。その車を運転できる村民の方も年を重ねると運転ができなくなります。その際に交通手段をどうするか検討する必要性を感じました。命にもかかわることであるため緊急時の対応を充実させる必要性を感じました。

(7) 農業への風評被害

農作物の風評被害が原発事故直後から広がっています。村のあちこちに放射線測定器が置いてあり安全であることをアピールしていますが、いまだに風評被害は残っています。

そこで、風評被害の影響で胡蝶蘭などの風評被害を受けにくい花の栽培をするという工夫をしておられました。個人でトルコギキョウの栽培を始めている方ともでありました。

第二項 実態調査の結果を踏まえた集落(地区)の活性化策

今回一年目ということもあり、活性化案を出すところまでは行わず来年に向けた調査をじっくりと行っていきました。しかしその中でも調査を通して今の村にもっと必要だと感じ、報告会でも発表したことは、「農業への風評被害や人のつながりなど、葛尾村が抱えるさまざまな課題に対して、住民一人一人がアイデアを出し合う」ということです。第一項で述べた各々の課題に対して、課題の解決のアイデアを持っている人はいるもののそれを共有できていないところがあるのではないかと感じました。また、ネガティブな要素が強い課題について村民みんなで話しあう場があまりないようなも感じたので、アイデアを出し合う機会があればもっとたくさん課題解決の方法が見つかっていくのではないかと感じました。

第三節 調査のまとめ

第一項 葛尾村の調査を振り返っての率直な感想

今回の調査の最終日にこの調査を終えての2つの質問，1. 葛尾村はどんな村だったか，2. 今回のプロジェクトで知ることができたことを参加したそれぞれのメンバーにインタビューしました。率直な個人の思いや葛藤を言葉のままに記録します。

Q1 葛尾村はどんな村でしたか。

(東條) 下葛尾村は若い人がいないという印象だったんですけど、僕は村民の方の団結力は強いが、役場の方との連携やこれからの課題が多くあると感じました。

(中島) 一週間しかいなかったんですが本当に皆さんあたたかくて、(葛尾村に)人が増えてほしいなと思った。旅行などに行ったときはその町に対して思いとかは生まれにくいけど、この町に対しては思うところがあり、その思いを形にしたいと思える町です。

(倉本)

温かさにつながりをとても感じました。今回のように外部の人が来てくれても温かくもてなししてくれたり、昨日みたいにつながりによってお互い助け合ったりしていたのを見て、この村にとってつながりと温かさはとても大きなものだと思います。

(勝部) ザ・日本という感じの同情の意識を強く感じました。皆さん優しく、でも逆にその優しさがお互いを引っ張り合っている感じもしたから、協調を重んじる村なんだと思いました。

(原) ちさのさんと一緒にすごい日本人、日本文化みたいなのが強いなと思ったと同時に、あったかさとかはあるけどそのあったかさは実際なんだろうと疑問に思った。なんか、すごく日本人らしい典型的な考え方をもった集団で、かつそれでもお互い気を遣っていたり、思っていることがあるのかなと感じました。

(中西) ものすごく明るくてご飯もおいしいしみんなが来てくれることを喜んでくれる、自分達は大学生なので孫のように本当にかわいがってくれてまた来年も来てねと言ってくれる温かい村でした。

Q2 今回のプロジェクトで何を知ることができましたか。

(東條) 自分がまだ行ったことのない東日本大震災の被災地というのを実際に目で見る事ができました。知るということでは今被災地がどういう状況なのか知ることができたので良かったです。

(中島) 過疎化とかそういうのって結構世の中で言われているけどけっこうそういう過疎化が具体的にどうなっているかというのは知られてないし、それに対してストーリーとして過疎化からなおったという話を聞いたりしてもその過程が、過疎化からがんばろうとしている町がどういう状況なのかをあんまり聞かないので、人が少なくなっている町の現状が、何か取り組もうとしている様子とかそういう町の詳しい街の動きが知れたと思います。

(倉本)

やっぱりまだ8年たっても復興していないものもあるのでやっぱり自分達もまだニュースとかをみたりして関心を持つべきだと思いました。

(勝部) まず政府が震災から8年たった今でも結構補助金をここに費やすんだなということあまり知らなかったの、それが建物などをみるなかで知ることができたのと、復興を考えた時にやっぱりいつも放射線というのが(話に出ることが)多くて、西日本豪雨災害では考えたことなかったけどいつもそれがついてきて影響が大きいし、その捉え方がけっこうジェネレ

ーションというか。子どもがいるかいないかとか、子どもが小さいか小さくないか、世代によって違うんだなということを知ることができました。

(原) アイリスの子たちをみていて思ったのは面白いと思ったことに対しての行動の変化がすごい。最初の時よりもしゃべるようになってたし、しゃべるだけじゃなくてなんか表情とかも変わってきていて、なんか最初の方、初日の交流会のときはちさのさんとかさきさんとか慣れているから結構話したりとかしてたけど他の人たちもその後の聞き取りとかからはしゃべっていたのは私の予想だけど慣れてきたっていうのもあるけど、葛尾村のことが面白いとか、好きだなと思ったからなんじゃないかなと思ったのと。

2つ目は、復興ってなにを持って復興なんだろうというのを割と考えさせられた。語り部の人はもう乗り越えましたって言って苦しい経験とかも話して、で話している時はすごい明るい熱弁っていうかなんか訴えている感じで泣いたりとかしていなかったからそういう意味で言えるというのが乗り越えたということなのかなと思ったけど、葛尾村の人からは話の Word としてはでてくるけど、なんか正直その悲しみとか苦しみを直接感じたのは A さんくらいであとの人はなんだかんだそういってもなんとかやっているとか今に関心があるとかそういう風に私は気にしているけどそういう感じなので、その人たちにとって「復興」はどの地点のどういう感情の時なんだろうって、しれたことじゃなくなっちゃたけど、そういうのがすごい思って、ということは私たちが今回の調査から戻ってその人たちにどういう形であるべきなのかというのを聞き取り調査とかをもう一度見直して考えていくと、すごい外れたものをしてそうだなとおもった。うちの復興像みたいなものを押し付けるんじゃないかなと思ったり思わなかったりしました。

(中西) いろんな人の話を聞いて、村の人とも交流する中で、なんだろう、本当に荒れた土地とか畑とか家がぼつぼつあるだけで何もないとよく言われる村の方々も兄もないんだよねと言われたりしてたんですけど、何も無いがあるかはその人の考え方次第だなと思いました。何も無いって思わなかったと思うのが正直で、自分も集会所とかで住む中で、集会所はまあ食器とかもあるしということで、そのあるっていうのを何をもってあるのかなのかっていう根本的なところを考える必要もあるのかなと感じました。村の人たちはみんな、何も無いという人たちからしたら無いものを、村の人たちは村の人たちはできるというのが結婚式とかも自分達で準備できたり、無いものはないんじゃないかなと逆に自分達も自立して生活できているので、自分達がインタビューしてもそんなに困っていることはないっていう感じ。だった。で、そのあるかないかというのを考える必要があるというのを知れたのと、あとボランティアの在り方というのを、 , , なんだろう自分達が手伝いにいくという感覚は違うなど。こっちにきて自分はほんとに何をしに来たのだらうという感覚になりました。ボランティアの在り方を考え直す必要もあるなというのを知ることができました。

第二項 来年度に向けて

この報告書に記したように、様々な課題が見つかり、改善できるところがあることを確認しました。しかし、復興というもののゴールそのものがどのようなものなのか、今一度、住民の皆さんや町役場の方々の気持ちを聴き、定める必要があると思いました。それを踏まえた上で、来年度の実施事項を検討していこうと思います。また、今回の調査で葛尾村の良さを多く感じ、発見しました。これらもうまく課題解決に生かしていきたいです。

謝辞

今回の調査に際して温かく協力し、私たちを孫のようにかわいがってくださった葛尾村の皆様、葛尾村についてたくさん教えてくださった村長さん、副村長さん、私たちの調査に惜しみなく協力してくださった葛尾村役場の渡辺さんを始めとする役場の皆様、地域振興課の皆様、その他今回の調査に携わって下さったすべての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震で被災された皆様、ご家族の皆様に謹んでお見舞い申し上げます。福島ならびに東北・日本の1日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。

2020年3月 広島大学ボランティア団体アイリス 一同

